The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「お姉ちゃんのばか」の「の」 : 日本語教育での取り扱いについて
Author(s)	古川, 由理子
Citation	日本語・日本文化. 2019, 46, p. 87-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71687
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

「お姉ちゃんのばか」の「の」[1]
―日本語教育での取り扱いについて―

古川　由理子

1.　はじめに

初級後半の学習者に、既習事項の総まとめとして映画を教材として見せることがある。筆者は、それに、宮崎駿監督の『となりのトトロ』を使用したことがある。そこで、主人公の妹・メイが主人公である姉の五月に向かって叫ぶ。

「お姉ちゃんのばかー！」

これは、メイの思いが叶えられない時に、メイが五月に対して発したセリフである。その後、五月もメイに対し、「メイのばか！」と応酬している。

この発話を聞いた学生が、メイのセリフ、「お姉ちゃんのばか！」の「の」は、なぜ「の」であるのか、なぜ「お姉ちゃんはばか」ではないのかと疑問を持った。

本ノートはこの疑問に日本語教育の観点から考察を加えたものである。

2.　先行研究

2.1　格助詞の「の」について

寺村（1991）には以下のような記述がある。連体―述語名詞の連体修飾語化の例として、(35) を挙げている。以下、すべて引用である。

(35)　a. 詩人の中西信太郎
　　b. 監督の西本さん
　　c. 首都の東京
　～中略～

なお、(35) のような「ノ」は「同格」を表すと説明されることがある。英語の ’Ronald Regan, the President of the United States’ のような名詞修飾になぞらえてのことであろうが、日本語については適切な用語とは思われない。また、この種の「ノ」は、(助詞ではなく)「ダ」の連体形とする説明があるが、それは上のことから妥当な説明であると思う。

ついでながら、まれに「N1 が N2（または Na）ダ」が、そのまま（順序を変えずに)「N1 ノ N2」となる言い方がある。

(37) a. おねえちゃんのバカ
b. 太郎の嘘つき

少し例を集めてみるとすぐ分かるように、この N2 にはいい意味のことばは来ない。慣用的な、一種の罵り言葉とみてよいだろう。英語の’You fool’などというのと似ている。

寺村(1991) p.249

以上の寺村(1991) では、「お姉ちゃんのバカ」などの例を、「慣用的な罵り言葉と見てよい」と述べているように、文法的な考察のみ行なわれている。「お姉ちゃんのバカ」のような「の」の存在を取り上げ、慣用的なものである、と世に知らしめたのは、寺村(1991) が初めてであり、本ノートを考えるきっかけにもなった。しかしながら、本ノートでは、日本語教育での「お姉ちゃんのバカ」の「の」について考察する目的があるため、寺村(1991) は参考とするにとどめておきたい。

「おねえちゃんのバカ」と同様な表現を代表するものとして、「お母さんのバカ！」を用い、認知言語学的なアプローチでその構造を明らかにしようと試みた研究に、小柳(2009) がある。小柳(2009) は、寺村(1991) および三宅(2001) を参考に、「お母さんのバカ！」のような表現における「の」は同格であるとし、現場性（「いま・ここ」）が必要であり、「きのうは、お母さんのバカ！」といった表現は成立しないと述べている。日本語教育においては、特に初級の段階で、

現場性という概念は重要な要素である。初級学習者にとって、まず、「いま、ここ」で日本語を用いる必要があるからである。小柳（2009）の論考は非常に意欲的なものであるが、「お母さんのバカ！」型の名詞句の「の」の働きを、参照点構造という視点から分析したものであり、直接、日本語教育に応用できるものではないため、本ノートでは紹介するにとどめておきたい。

2.2 罵り言葉

前節で、「お姉ちゃんのバカ」などの「の」は、寺村（1991）から「慣用的な罵り言葉」という指摘を受けていることを述べた。では、罵り言葉とはいったいどのようなものであろうか。

荒井（1981）では、次のように述べている。

悪態行為をマイナスの言語行動とみたり、「軽口」、「あだ名」、「媚態としての悪意」などのような親密性あるいは特別の間柄での「社交性」の表現として、敬語行動の一種類とみなすことはこれまでもなされてきた。（中略） つまりこうした本来は状況に応じ行為者の意図をもっとも効果的に実現するための戦略的な行動なのである。（下線部：筆者）

いわゆる「罵り言葉」を日本語教育で導入すべきかどうかは、専門家の意見も分かれるであろう。しかし、学習者が日本語環境にさらされる限り、罵り言葉を使用はしないにせよ、聞く機会はあるかもしれない。そのため、日本語教育での導入には一考の余地があるであろう。

3. 「お姉ちゃんのばか」的表現の制約

3.1 N1（人）の～

「お姉ちゃんのばか」のように、「N1（人）の～」の場合、N1には制限がある。それは、N1が話し手と親密な関係および話し手がN1に庇護されているような関係である。例えば、N1に用いられる例としては、先生、お母さん、お兄ちゃん、先輩など罵り言葉を発する者よりも立場が上で、罵り言葉を発する者が心情的に甘えられるような存在や、親や先生のように庇護を求められるような存在に限られる（「先輩の裏切り者！」NHKドラマ「輝く湖」にて（2004年11月13日

放送）杉浦直樹　八千草薫、「お父様のおたんこなす！」)。

このような指摘は 2.1 で紹介した小柳（2009）でも述べられており、N1 には呼びかけに使う名詞（人名、呼称名詞、愛称など）｛お父さん、お母さん、お兄さん、太郎、ゆきちゃん、先生、先輩、・・・・・｝、N2 には、マイナスの評価を表す名詞｛バカ、エッチ、助平、意気地なし、石頭、わからず屋、・・・・・｝などが挙げられている。

一方、N1 が、学生、太郎、子ども、弟、後輩など、罵り言葉を発する者が、どちらかと言えば庇護を期待されるような相手である場合、日本語母語話者であれば違和感を覚えるのではないだろうか。

？？　学生のバカ　　？？　後輩のバカ

？　太郎のバカ　　？　弟のバカ

子どもである「太郎」や「弟」が N1 に来る場合は、日本語母語話者であっても判断は分かれるかもしれない。しかし、このような例が、「お姉ちゃんのバカ」よりは許容度が低いのは、共通の認識なのではないかと考える。

さらに、話し手は N1 に甘えのような感情を持っていることも特徴の一つである。「お姉ちゃんのばか」のような発話は、話し手の願望を N1 が叶えてくれなかったり、裏切ったりする場合に起こる。さらに、「N1（人）の～」の「～」の部分には否定的表現のみが使用される。例えば、あほ、ばか、くず、ぼけ、かす、おたんこなす、裏切り者、などである。肯定的表現をもつ、天才、美人、お金持ち、などは使用されない。

？？　お姉ちゃんの天才　　？？　お姉ちゃんの美人

？？　お姉ちゃんのお金持ち　　？？　お姉ちゃんの果報者

この点についても、上述の小柳（2009）が「現代語の用法を見る限り、「太郎の天才！」のような使い方は、あったとしても特殊な効果を狙った奇抜な表現のような印象を与える」と述べている。

3.1.1　N1（人）の［野郎／やつ］

「バカ」などの罵り言葉に類似するものとして、「野郎」「やつ」も挙げられよう。しかしながら、この表現は、「お姉ちゃんのバカ」のように、相手に対する

呼びかけには使えないようである。姉に向かって、「お姉ちゃんの野郎」「お姉ちゃんのやつ」などは使用されない。したがって、「野郎」「やつ」という罵り言葉は日本語教育では特に取り上げる必要はないと考えられる。一方、この野郎、こやつ、などという呼び方は可能である。ただ、このような呼び方は相手に不快感を与える可能性があるため、日本語教育で扱う場合は、理解語彙にとどめ、使用語彙としては注意喚起が必要である。日本語のレベルで言えば、上級になってから扱うのが望ましいのではないだろうか。

3.1.2 N1（人以外）の～

話し手がN1をコントロールできず、N1に強い否定的評価を行なう場合、「N1（人以外）の～」が可能になる場合がある。しかしながら、母語話者でもこれらの表現の許容度は分かれるであろう。

？ 阪大のバカ　？ スギ花粉のバカ　？ スマホのバカ

？ 宿題のバカ　？ 文科省のバカ

ただし、上に挙げた例は、相手に面と向かって発話する場合は、許容されることが多いようである。

3.2 N1のN2

本節では、「N1のN2」いう表現が日本語教育のテキストでどのように扱われているか、3冊のテキストを取り上げて紹介する。

3.2.1 『初級日本語』

『初級日本語』では、まず、第1課で「タイのがくせい」という表現が出てくる。「タイ」を様々な国（かんこく、やイギリス、など）と入れ替えて、学習者の所属する地域を表現できる。このN1とN2は「所属」という関係で捉えることができよう。

次に、同じ第1課で、「にほんのとけい」「ちゅうごくのラジオ」「アメリカのテレビ」という表現が導入される。これらは、製品がどこで作られたかということを意味しており、「帰属」の関係と考えられる。さらに、「がくせいのつくえ」

「せんせいのいす」「ジョンさんのボールペン」という表現が出てくる。これは、「所有」という関係で捉えられる。

なお、『初級日本語』には、「お姉ちゃんのバカ」のような同格を表す「N1 の N2」とう表現は見られない。「お姉ちゃんのバカ」のような表現でなくても、「となりの山田さん」「学生の田中さん」などの同格の「N1 の N2」表現を導入するかどうかは、教員の判断にゆだねられているのではないだろうか。

3.2.2 『みんなの日本語』

次章で再度、詳しく見るが、本節でも『みんなの日本語』がどのように「N1 の N2」という表現を導入しているか確認しておく。

まず、第 1 課で「IMC のしゃいん」「ふじだいがくのがくせい」という表現が提出される。これは、『初級日本語』同様、「所属」という関係で捉えられる。

第 2 課で、「コンピュータの本」「「じどうしゃの本」「にほんごの本」という表現が出てくる。これらは、「種類」を表していると考えられる。その他、同じ第 2 課で、「わたしの机」「さとうさんの机」「せんせいの机」という表現が出される。これも、『初級日本語』同様、「所有」の関係と解釈してよいだろう。

この他に、テキストには直接提出はされていないものの、『みんなの日本語初級 I 第 1 版　教え方の手引き』に参照項目として、「山田さんの友だち」（所属）と「友だちの山田さん」（同格）の区別が述べられている。この区別を導入するかどうかは、『初級日本語』と同じく、教員の裁量に委ねられている。

3.2.3 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』では、第 1 課で、「インドの学生」「私の専門」という「N1 の N2」という表現が導入される。英語による説明では、「N1 の N2」という表現は、「N1 の N2」の N1 と N2 の関係によって意味が決められるとある。

「わたしのカメラ」などは「所有」、「にほんごのせんせい」や「だいがくのがくせい」は「種類」、「インドの学生」などは「所属」というように、上記 2 冊のテキストと同様に捉えられよう。

さらに、『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』では、同じ第 1 課に「ともだちのブラウンさん」という表現が出てくる。この「N1 の N2」の関係は「同格」の「の」によって結ばれたものと考えることができる。つまり、本テキストでは、「お姉ちゃんのバカ」のような「同格」の「の」を用いた「N1 の N2」という表現が、既に第 1 課から提示されていることになる。

4.　日本語教育での取り扱い

本章では、日本語教育で、「お姉ちゃんのばか」のような表現がどのように扱われているかを見てみよう。

4.1　初級日本語教科書

3.2 で述べたように、『みんなの日本語　初級 I 本冊』では、「N1 の N2」のような表現が次の課で提示されている。

L1	IMC のしゃいん		
	ふじだいがくのがくせい	（所属）	
L2	じどうしゃの本	（種類）	何の本ですか
	わたしの机	（所有）	だれの本ですか

この他、第 2 課では、学習者のレベルによっては、「となりの山田さん」「友達の田中さん」といった表現の導入も可能である。「となりの山田さん」「友達の田中さん」は、「IMC のしゃいん」や「ふじだいがくのがくせい」など、N1 が N2 に所属する表現とは異なり、種類を表す「じどうしゃの本」などとも異なる。「山田さん＝となりの人」「田中さん＝友達」というように、同格の「の」に近いと考えられ、「お姉ちゃんのバカ」の「の」に類似している（「おねえちゃん＝バカ」）。「N1 の N2」がまとまって導入されるのは、第 1 課と第 2 課である。したがって、「おねえちゃんのバカ」のような表現は、教師の判断で、第 2 課あたりから導入するのが妥当だと考えられる。

なお、3.2 で見たように、『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』では、第

1 課から既に本文において、「ともだちのブラウンさん」という「同格」の「の」を用いた「N1 の N2」の表現が提示されていた。『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』では、第 1 課でこのような表現を導入することを目指していると考えられる。

4.2　文法問題集

『日本語文法　セルフマスターシリーズ 3　格助詞』では、「お姉ちゃんのばか」のような表現は取り扱われていない。

5.　日本語教育でどのように取り扱うべきか

遠藤編（2011）が述べるように、最近の日本語学習者には、ポップカルチャーやアニメの影響が大きい。そのため、学習者が「お姉ちゃんのばか」のような表現に遭遇する可能性は少なくない。

「N1 の N2」という表現は、『初級日本語』上、『みんなの日本語』初級 I 本冊、『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』VOLUME1:NOTE のどのテキストにおいても第一課で導入されている。テキストによってばらつきがあるものの、まず「わたしの本」「わたしの国」など「所属」を意味する表現から、「車の雑誌」「スイスの時計」など「種類」を表すものが導入される。その後、上で述べたように「となりの山田さん」「友達の田中さん」といった、「同格」の「の」と解釈しうる表現の導入がなされている。

以上を考察に入れると、人間関係を扱う場合の N1 と N2 を「の」でつなぐ場合の使用方法について、語用論的に、相手に心情的に甘えられ、庇護を求められる人物が N2 に用いられる、などの人物関係を詳細に設定した上で、N1 を人に限り、「～」の後の部分を否定的表現に限った「N1 の N2」を、理解語彙として初級段階で導入すべきなのではないかと考える。既に述べたが、学習者がこのような罵り言葉を使用するには大きなリスクを伴うが、学習者が実際、このような表現を耳にしないとも限らない。日本語教育の多くのテキストの第 1 課で導入される「N1 の N2」という表現であるなら、学習者にとっては既習事項であるため、いやおうにも気になるところであろう。そのため、初級段階で、あくまで、

理解語彙として導入しておくべきではないかと考えるに至った次第である。

謝辞：本ノートの執筆にあたり、査読者の方から大変貴重なコメントを数多くいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

【注】

1　本ノートは、2013 年 4 月 21 日に行なわれた北大阪言語フォーラム第 35 回での発表を基にしたものである。言語フォーラムで貴重なご意見をいただいた参加者の方々に深く感謝申し上げます。

【参考文献】

荒井芳廣（1981）「悪態行為論―戦略的相互作用としての悪態―」『講座日本語学 9　敬語史』明治書院

小柳昇（2009）「『お母さんのバカ！』型の「ｘのｙ」がどのようにして生まれるのか―参照点構造による分析―」『拓殖大学院言語教育研究』第 9 号

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

三宅知宏（2001）「『主要部』の概念と“X の Y”型名詞句」『鶴見大学紀要国語国文学篇』38　pp9-18

森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得―日本語教育に生かすために―』ひつじ書房

遠藤織枝編（2011）『日本語教育を学ぶ　第二版―その歴史から現場まで―』 三修社

【参考テキスト】

『初級日本語』上（2011）東京外国語大学留学生日本語教育センター　凡人社

『できる日本語』初中級本冊（2012）アルク

『日本語文法　セルフマスターシリーズ 3　格助詞』（1987）益岡隆志・田窪行則共著　くろしお出版

『みんなの日本語』初級 I 本冊 (2012) スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級 I 第 1 版　教え方の手引き』（2016）スリーエーネットワーク

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』VOLUME1:NOTES(2000)　筑波ランゲージグループ　凡人社

〈キーワード〉「お姉ちゃんのばか」　同格　日本語教育　罵り言葉　理解語彙

‘No’in Oneechan no Baka; How to Introduce It in Teaching Japanese as a Second Language

Yuriko FURUKAWA

I sometimes use My Neighbor Totoro (director: Hayao Miyazaki) as a teaching material for learners in late elementary level. Main Character, Satsuki’s sister, Mei, yells to her sister, “Oneechan no baka (You, stupid, Sister)!” Mei said so when she realized her wish wouldn’t be fulfilled. One student, who heard this, asked me what the grammatical status of the “no” in “Oneechan no baka” is, and he wondered why it is not “Oneechan wa baka (Sister is stupid).” Teramura (1991) commented that “N1 ga N2 (N1 is N2)” can be transformed as “N1 no N2”, and that N2 cannot be a word of compliments or praise and that it is a kind of abusive language. Arai (1981) regards a hateful behavior as a kind of honorific behavior and comments that this behavior is an expression of sociability, which is only possible between people in a close relationship. Among these behaviors are persiflage, nicknames, ill intent as a means of indulgence. He added that this is an act to express the speaker’s intention most effectively. There is a restriction to be an N1 as in “Oneechan no baka.” N1 has to be in a close relationship with the speaker, or the speaker is under N1’s wing. In addition, the speaker has an emotional dependence on the N1. Utterances like “Oneechan no baka” are made when the speaker’s wish is not fulfilled. And the word that follows “no” has to have a negative connotation like stupid, rubbish and junk. Words like genius, beauty, which has a positive connotation, cannot occur in this position. In many introductory textbooks, the particle “no” is introduced as the one to imply “belonging” or “affiliation”, as in “Jidosha no hon (a book on cars). Japanese learners these days are influenced by pop culture and anime, so they are more likely to come across expressions like “Oneechan no baka.”

To sum up, setting up personal relationship and the situation in detail from pragmatic point of view, expressions like “Oneechan no baka” should be taught in an early stage.